
怪獣対忍術

亀7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪獣対忍術

【Nコード】

N4539T

【作者名】

亀7

【あらすじ】

転生して怪獣の力で暴れます。

1111が、2111、（前書き）

手探りです。

「うんは、どい？」

ウルトラマンの怪獣に憧れていた。

変な話だけだね。普通は、ウルトラマンの方だろうけど。

だけどさ、光線やら吐けたりして暴れたいさ。殺すことはしないけど。

でもなりたかった。そして、暴れたかった。

そしてなってしまった。力とその姿を持ってしまった。

なぜなら、死んだ後神様つてのに遊び半分で頼んでみたら簡単にもらえた。

今は、人だけど力をいれてみたら言葉にならないほど凄かった。

で、暴れてみようかなと思った、だけど周りは木々だから姿を見えなくしてひとを探していたら見つけた。

だけど服装は、忍者（笑）漫画みたいなものだった。

そして分かってしまった。

ここがどこなのか、だけど……

「なんでNARUTOの世界だよ。」

1111は、2111。(後書き)

なんとかしていきます。

今は、いっただろ？(前書き)

..しじこせしじ

今は、いつだ？

まあ、まずは体をクローンとかできないようにして。ん？なぜかってそりゃこの世界、忍者出てくるのに細胞とか普通にいじくってる奴（オカマねこの世界の悪役の）がいるから。後は、ジャックに出てきたサータンの中性子の体にして見えなくしてっと。

「一体、これは・・・（気配がするな）」

「何かが起きたのは確かだな。（ああ）」

「とにかく報告するぞ。」

「ああ・・・！そこだ」

ビュツザグ

クナイは、体を通り抜けて後ろの木に当たった。中性子なので当たりません。

「そこにいることは、分かっているぞ。」

忍たちはクナイを構えた。

「・・・（どうしようか、あまり関わりたくないけど）何ですか？」

「これは、お前がやったのか？」

「ええ、そうですけど（メビウスに出てきたボガールの口を作ってダイナに出てきたバオーンの鳴き声が出るようにしてっと。）」

「なぜこうなった？」

「あんまり言いたくないのですが。」

「なら、里まで来てもらおうか。」

「いやだといったら？（いっせえの）」

「力ずくだ。」

ビュと忍たちは動いた。だが、

「（今だ。）バオーン。」鳴き声を出した。

「なん・だあ・・・ゴオ。」バタ

「全員お休み。・・・だけどすごい威力だな。さてと、額当ては・・・

・これは草みたいだなあ。っていうことは、草隠れか。」またわかりやすい。

「さてと、お金少しもらって行くか。」
ん、酷い？命は取らないからいいでしょ。
さてと、旅をして原作を満喫するか。

そして、旅をしながら中忍選抜試験が始まるということで木の葉に向かっています。

今いるのは、木の葉の近くの宿です。お金は、山賊が襲ってきたりして眠ってもらってそのままもらいました。
で、

「お前の名は？」

我愛羅に会いました。なぜかというと

我愛羅が殺気と砂を出す（自身の兄のカンクロウに）

それを止めようとする
襲ってくる。

バリアーを出す。

細胞をフルに使った殺気を出す。

気絶して守鶴を出そうとする。

ティガに出てきた邪神の闇（弱め）を出して止める。

そうしたら我愛羅をテマリがささえて

カンクロウに

「おいあんた、大丈夫か。」

「ああ、大丈夫じゃん。」

「あの子は？」

「オレの弟じゃん。」

「なんで、襲われていたんだ？」

「たまたま、暴走するんじゃない。」

「大変だな。」

「うう・・・テマリ、オレは？」

「暴走したのよ、我愛羅。」

「誰が止めたんだ？」

「あいつさ。」

我愛羅がこっちに向いて聞いてきた。

「お前が止めたのか？」

「ああ。」

で、さっき状況になって

「じゃあ、俺はこれで。」

「お前の名は？」

「一応名は……(適当に)怪という。」

「怪か。」

これが、原作キャラとの最初の遭遇だった。

今は、いつだ？（後書き）

1人目の原作キャラに遭遇。

木の葉に着いた。(前書き)

設定

名前 怪

年齢 18

能力 ウルトラマンに出てくる全ての怪獣の力と姿

木の葉に着いた。

さてと、あの後これからあなたはどつするって聞かれたけど。

「木の葉に向かっている。」

って言わず適当にはぐらかした。

だって気ままにいきたいもん。絶対に、一緒行こうって言いそうだったもん。

で、今テレポーションして木の葉の近くにいます。

最初からしとけだど？

話を延ばす為だよ。

おおっと少しメタだったか？

まあ、今はというと。

「で、君はどこ忍かな？」

顔を半分隠して目が死んでいる白髪の男。

うん。間違いない原作キャラの

コピー忍者の

はたけカカシだ。

なんで、目の前にいるんだよ。

「ええつと、なんか用ですか？ってか何もしていませんが？」

「いきなり現れてそれはないよ。どこの忍だ？」

うわ、口調変わった。

「忍ではないですよ。」

「・・・チャクラが、上忍より多いが。」

「(そうなの?) さあ知りませんでした。じゃあ、これで。」

「一緒に来てもらおうか。」

「いやです。じゃ。」

テレポーションして逃げた。

カカシ side

消えた！

時空間忍術・・・いやチャクラの動きはない。

どういうことだ？

・・・このことは、火影様に報告した方がいいな。
ビュッ

敵認定になりそうな怪だった。

カカシ Side out

さて、原作キャラに会っているがこれからどうしよう。
やっぱり、傍観していようか。

でも暇だしな。少し動こうかな？

「でも、ここはどこ？」

・・・目の前にラーメン屋がある。

「まあ、食って考えよう。丁度、昼だし。」

・・・一楽だな。だっておじさんの聞いた声だったから。
まあ、とりあえず

「味噌ラーメン一つ。」

「あいよ。」

・・・
・・・
・・・5分経過

「はい、味噌ラーメンお待ち。」

「いただきます。」

・・・
・・・
・・・

言葉で表すことが出来ない。

うまい。

ただそれしか、思いつかない。

ナルトが、いつも来るのが理解できた。

「テウチのおっちゃん。」

「おおナルトか。」

その言葉を聞いて後ろを振り返ってみれば、
金髪にオレンジ色の服を着て髭が生え蒼い瞳の笑った少年
うずまきナルトがいた。

主人公との最初の遭遇だった。

木の葉に着いた。(後書き)

これからどう進ませようか？

ヤンチャなっ。(前書き)

どうなるだろう。

どうする？

その後、ラーメンを食べて森に行った。
ナルトとは、話をしたりしていない。

興味がなかったし。

で、森でぶらぶらしていると、
ゼツが現れた。

いやいやマジでなんで？

しかも、白ゼツだけだし。

「君、暁に入らない？」

「なんで？」

「君、強いでしょ。」

「いやいや、でも人を殺したことないよ。」

「でも入らない？」

「入る。」

だって悪役になってみたかったし。

「そ、そう早いね。それじゃアジトに行こう。」

暁のメンバーが使う術受けない体にしてっつと。

「でも、いつから目をつけていたんだ？」

「少し前に君が山賊を倒した時を見てね。」

「そうか。」

さてと、暁に入るということは尾獣の封印や忍術を使えるようにしない。

まあ、この体なら見ただけで出来そうだけど。

チャクラは多いみたいだし。

でも、忍術は使う気がないけど。

さて悪役になりますか。

でも一体誰と、ペアを組むようになるのだろう。

ゼツみたいに一人なのか？

まあ、リーダーに聞くか。

やじするっ。(後書き)

暁に入る。

暁に。
(前書き)

バトル描写はいつからあるのか？

暁に。

今はというと、

「お前には、七の指輪だ。」

と、リーダーのペインに言われる怪。

暁の目的を説明され、

メンバー全員にアジトで挨拶して渡された赤雲の服とメンバー用の指輪

どうやら指輪の文字は七のようです。

「で、具体的には何をすれば？」

「本来、暁は尾獣を宿している人柱力を集めるのだが今は準備で後3年かかる。それまでは、資金調達などをしてもらう。具体的にやるのはビンゴブックにのっている奴等を殺して換金所で換金することだ。」

「わかった。」

「で、本来二人一組で行動しなければいけないがお前は一人で行動してもらおう。」

「なぜだ？」

「お前は一人で十分だろ。」

「まあいけど。」

だが、

「じゃあ、これで話は終わりだ。」

「なっとくいかねえ。」

「飛段、お前はだまっている。」

「だけどよう、角都。新入りがいきなり一人つてのは……。」

「オイラも。少しなあ、うん。」

「……いろいろ言われたが、

なんとかリーダー、角都、ゼツなどが抑えてくれた。

時間が経ち

で、今

「イタチ、鬼鮫、俺のメンバーで木の葉崩し後の木の葉にいます。」

「誰に言っているのですか？」

「いえ、一人事です。」

「そうですか。」

「……………」

「イタチさん、あなたでも故郷に未練がありますか？」

「いいや……まるで無いよ。」

「じゃあ、俺は別行動とりますのでじゃ。」

「つて、ちよつと!!！」

ビュッ。

「いないな。」

「ええ。まったくなぜあのような男を仲間にな？」

「さあな。それより人柱力を見つげう。」

「ええ。」

で、怪は

「味噌ラーメン。」

「あいよ。」

「オレもだつてばよ。」

「あいよ。」

……しかも、ナルトと一緒に、ラーメン食べていました。

暁に。(後書き)

チャクラを練るなどが出来るようになっていきます。

バトルか？（前書き）

バトル描写かけるかな。

バトルか？

まあ、まず

「味噌ラーメン、おかわり。」

「あいよ。」

ラーメン食おう。

そして、

早くここから消えよう。

確実に面倒なことになる。

ズズーツ、

「じゃあ、ごちそうさまでした。」

さて、逃げるか。

「聞いた通りに来て！……。」

「おうエロ仙人。」

めっちゃ見られている。

エロ仙人またの名を自来也

「……もういるのかのう？……暁。」

バトラなければいけないのか？

「……いやあ、ラーメン食べに来ただけど。」

「嘘をつけ……ナルト少しこっちへ。」

「なんだよ。エロ仙人。」

「ん、君がうずまきナルトか。（知っているけど。」

「……お前、誰だつてばよ？」

「俺は怪、一応君を捕まえに来た……って言いたいけどノルマが
違うから別にどっちでもいいけど。」

「……なんで捕まえに来たんだつてばよ？」

「それはエロ仙人に聞いて。じゃあね。」

テレポーテーション。

「待て・・・消えた！（あれは、時空間忍術・・・いや、そんな素振りはない。）」
「あれ消えたつてばよー！」

そして、イタチ& amp・鬼鮫を探してしまくって、

「珍獣の間違いでは？」

「よつと、つてあれ。不味かったか？」

「「「「「「！？」」「」「」「」

「・・・お前は、あの時の。」

「ん？・・・またか。」

「カカシ、そいつ知っているのか？」

「ああ、中忍選抜試験の時に不信な奴がいたつて言っただらうそれがそいつさ。」

「・・・そういえば、さつき九尾の人柱力に会ったけど自来也がいたから止めたよ。後、なんかエロ仙人つて言われてたから少し笑えた。くくつ。」

「あの伝説の三忍が？」

「ええ、白髪のじいさんの。」

「なあ、一体どうなっているんだ。」

「そうよ、目をつぶっているから分からないわ。」

「とりあえず、目を開ける。目と目を合わせなければ問題ない。」

「それは、そうだけど・・・」

「・・・どうする？バトルするの？俺は良いけど。」

「いや、これ以上はナンセンスだ。帰るぞ。」

「せっかく、うずいてきたのに。」

「俺はラーメン食って来る。」

「・・・話を聞いていたのか？」

「睨まないでもちゃんと逃げる。食った後に。」
「・・・今の状況が分かっているのか？」
「ええ一応。それよりも早く行かないと人柱力、どっか行くことになつていたけど。俺のノルマは違うけど。」
「・・・不安だが、捕まるなよ。」
「ああ、逃げる時は逃げる。」
「良いのですか？イタチさん!？」
「俺たちは帰るぞ。」
「くっ、捕まらないことを頼みますよ。」
「分かっている。」
ビュッ。
「ちっ、俺たちは無視かよ。」
「じゃあ俺も。」
「逃がすと思うか？」
取り囲まれた。
「・・・なんで？まさか二人がいないからか？」
「そういうことだ。」
「増援来ました。」
20人の暗部が出てきた。
「ああ、あの男だ。」
「・・・捕縛するぞ。」
「気をつける。妙な術を使うぞ。」
「はあ、バトルはあまり好きでは無いのに・・・。」
「じゃあ捕まるか？」
「そんなことしたらメンバーから怒られるからやだよ。」
動くか。

バトルか？（後書き）

とぅとぅとぅバトルります。

殺すか？いや生かすか？（前書き）

バトル

殺すか？いや生かすか？

まずは、

「逃げる。」

「逃がさないぞ、」

クナイを投げて来た、って

「木遁・四柱牢の術」

「木遁だと、ってうお」

狭い

「2、3センチしか隙間ねえ！」

「よくやった、テンゾウ。」

テンゾウ？・・・ヤマトか！

「まさか、オカマの実験の産物とは、」

「驚いたか？」

「まさか来るとは・・・。」

「さあ、観念しろ。」

テレポーテーションで少し遠くへ

「誰が？」

「なっ！」

「さっきまでいたはずだ！」

「くそ、またか。」

「どういうことだ？」

「前もいきなり消えたんだ。」

「時空間忍術か？」

「そんな暇はなかったぞ。」

「じゃあこちらも」

両腕を剣に変えて（レオからツルク星人の能力）

「やるか。」

音速で動いた。

「なっ、」
「早い、」
「二人目。」
「ぐっ、」
「くそ、」
「四人目。」
「六人目。」
「八人目。」
「十人目。」
「十二人目。」
「十四人目。」
「十六人目。」
「十八人目。」
「にじゅうに（バキッ。）木遁か。」
「木遁・大樹林の術。」
「テレポーテーション」
「またか！」
「これで終わり。（バキッ。）また分身。」
「火遁・豪火球の術。」
「カカシが術で」
「うお。避ける。」
「うおら！」
「アスマがチャクラ刀で殴りかかって」
「あぶね。」
「はあ。」
「ガイが蹴りを」
「くそ。ってなんで木に絡まって・・・幻術か！」
「終わりね。」
「クナイで刺してきた。」
「よし。」

でも、そいつは土で出来た偽物。

「残念。」

「「「「「!?!?」「」「」「」

「いつの間に?」

「十八人目ぐらいから。」

「何!」

「手応えは有ったぞ!」

「とりあえず、」

ザシユツ

「アスマ!」

「あんたも、」

ザシユツ

「紅!」

「お前は連続、「二回切り

ザシユツ、ザシユツ

「テンゾウ!」

「木の葉・連「させん。「があつ。「蹴りを入れ

ザシユツ

「ぐつ。」

「ガイ!」

「終わりだ。」

ザシユツ

「がふつ。」

「さあーとと。ああ、大丈夫気絶ぐらいの軽めに切っただけだし。」

「ぐつ。」

カカシは、力を使いきったな。

「さて、ラーメン食べて帰ろう。」

そして、テレポーテーションで一楽へ向かった。

殺すか？いや生かすか？（後書き）

一応、言いますが土は術ではなくエネルギーを送って操ってしました。

なのでチャクラもあり、見分けられません

ラーメン食った後に(前書き)

どうなるかな？

ラーメン食った後に

さて………

「一樂で食ったし。どうしようか？」

木の葉から出ないとまたバトならければいけないような？

「気のせいかな。」

今から……ってその前に

「ゼツ？いるだろ、出てきたら？」

つと木の方に言ったら、

「……バレタカ。」

「やっぱり、ばれちゃったかあ。」

木からゼツ（白黒どちら）も出てきた。

「どうせ、見張りだろ。」

「うん、まあそんなところ。」

「普通一人で行動スル奴が突然、一緒二行ク、ツテ言エバ気ニナルワ。」

まあ確かに、

「っで、どうしようかと思う。」

「何が？」

「アジトに戻ろうか、賞金首狩るか、ノルマの六尾を探すか。」

「六尾を見に行ったら？」

「ドンナ奴カ知ラナイダロウ？」

「ん、じゃあそうするよ。そうリーダーに伝えて。」

「分かったよ。」

「ジャア、気ヲツケロヨ。」

「出来るだけな。じゃあな。」

テレポーテーションで木の葉の外へ、

「……モウ木ノ葉ノ外ニイル。」

「……速過ぎだよね。」

「アア……。」

「さて、まずは賞金首狩りながら探すか。」
「そう簡単に見つかるわけがないしね。」

「それと今更だが人の血を見ることに恐怖がないな。」

「この世界に染まってしまったか？」

「まあ、しょうがないよな。」

「この世界危ないし。」

「ええつと、手配書つと。」

「さて、抜け忍辺りを狩るか。」

ラーメン食った後に（後書き）

まあ、この世界だといやでも慣れますよね。

今は？（前書き）

どうなるこれから？

今は？

あれから、半年

んと、今換金所で

「・・・こいつは、800万両。っでこっちの二人が500万両の
抜け忍ね。」

換金しています。

「今、確認する。」

相手は、いろいろ黒い奴だったから殺してもあまり気分は悪くない。

「・・・どうやら、全員当りだ。」

「そうか。」

「今、金を用意する。」

少し太った男は、金を取りに行った。

これで50人ぐらいだ。

黒い奴を多めに狩っている。

角都に

「一日に狩るのは多いが、もっと大物を狙え。」

って言われているけど、正直大物って、抜け忍じゃないのが多いんだよなあ。

はたけカカシとか猿飛アスマとか、

まあ、例外は暁のメンバーとかだけだ。

そうそう、俺も一応3000万両の首になった。

理由はあの時の木の葉の面子をボコボコにしたからだ。

それとあの面子、1ヶ月入院だと。

角都が言うには、

「まだまだ低いぞ。」

「・・・どんだけだよ！

「はいよ。金だ。」

「ん、じゃあね。」

「今度はもつと、大物を頼む。」

「運が良ければ。」

テレポーテーションで今のアジトへ

つで、

「角都、金だ。」

角都の横にアタッシュケースを置いた。

「怪か。また小物が……。」

「ん、まあね。」

「もつと、上を狙え。」

「下の方が安全だからさ。」

「まあ、しないよりは良いが……。」

「でも、あまり俺らに金回らないな……。」

「しょうがないだろ。組織のための金だからな。もしくは大物を狙え。」

「……まあ、いいや。じゃあ行くは。」

「大物をな。」

「出来ればな。」

テレポーテーションで移動

で、疾風伝の半年前まで話を飛ばして、

「ねえ、怪。前から思っていたんだけど、」

「なんだゼツ。」

「ナゼ、俺たちノ孢子ガ才前二八付カナインダ？」

「さあ、それは聞かれても分からないよ。」

実体がないからだと思っけどね。(エースからアプササールの能力) それと体の本体は別の空間にあるし。

ゼツと会う前から。

「そう……。」

「じゃあ、後半年ぐらいで目的の尾獣集めか？」

「そうだね。」

「じゃあ、準備しないと。六尾の捕獲へ。」

次回、原作疾風伝へ。

今は？（後書き）

はい、かなり飛ばして疾風伝です。

おそらく六尾のウタカタとの戦闘は書かないと思います。

多分、封印ぐらいにしか出てこないと思います。

飛ばして。(前書き)

はい、疾風伝です。

飛ばして。

儀式の準備が出来たので、

「リーダー。」

「なんだ？」

「六尾を捕まえた。」

つと言いウタカタを地面に置いた。

「・・・怪。」

「ん？」

「命令したのは昨日なんだが？」

「ああ。」

「早くないか？」

「昨日の夜捕まえたんだ。・・・だめなのか？」

「いや・・・。とりあえず、口寄せの術。」

つとリーダーは、外道魔像を呼び出した。

「でかい。」

つで集まったメンバー全員から「早えーよ。」つと言われ、

「良いだろ。遅れるより。」

つと言った。

「・・・怪？」

「なんだゼツ？」

「前カラ見張ツテタノカ？」

「じゃなきゃ無理だろ。」

「いつからだ？」

つと角都から聞かれて、

「普通に、半年前から狩りついでに。」

あの頃からずっと見張ってた。

にしても、ウタカタこの世界じゃ里を抜けていないとは・・・
アニメの話どうなるんだ？

「・・・とりあえず、封印するぞ。」

つと言いリーダーが言っつて外道魔像の指に全員乗っつ

「封印術・幻龍九封尽」

と言い封印を始めた。

3日間し続けた。

そして3日経ち、

「これで終わりだ。」

「はあ、終わった。じゃあ、一楽に行くか。」

と行こうとしたら、

「怪さんっすね？」

と後ろを向いたら、

「・・・誰？」

「新入りのトビっす。」

仮面のトビまたは裏のリーダーうちはマダラがいた。
なぜ？

「・・・何の用だ？」

「いやあ一人だけ、挨拶していないから挨拶しておこうかなと思
つて。」

「俺だけ？」

「ええ、今まで会えなかったからっす。」

「そうか・・・ん？」

そんなにアジトにいなかったけ？

「どうかしたっすか？」

「お前の相方は？」

「いや俺は、補充要員っす。」

「そうか。」

一緒に組むのかと思った。

「・・・正規のメンバーになれたら良いな。」
「はいつす。」

「・・・あれ本当に演技なのか？上手すぎだろ。
にしても、またノルマが来るのか？」

「だって、メンバー倒されちゃうし・・・」

「となると八尾か相手は？」

「いやナルトか？」

「どちらでも良いが・・・」

「で何日か経ち、木の葉にいます。」

「なぜなら・・・」

「ナルトが帰って来たからです。」

「さて、」

「お久しぶり。」

「つと挨拶した。」

飛ばして。(後書き)

はい、ウタカタは短めです。
次、バトルか？

いやあ。(前書き)

バトルは？

いやあ。

ひさしぶりって、

「ナルトが帰って来たから来たよ。」

「綱手、こいつが……。」

「カカシ達を倒した、暁か……。」

「んん、1ヶ月入院したって？」

「まあね。」

「ナルト……っていきなりかよ！」

「螺旋丸！」

「残念。」

実体を無くした。

「……!?」「」「」「」

「まあ、いきなりはびっくりするか……。」

「すり抜けた？」

「そういうこと。で、聞くけど砂に行くのか？」

「だったらどうするってばっよ。」

「だったら急いだら良いんじゃない？」

「なぜだ？」

「尾獣を封印すると我愛羅は死ぬからさ。」

「尾獣？」

「我愛羅の中にいる狸のことさ。」

「なんで我愛羅は死ぬんだってばよ……！」

「それは砂のチヨって奴に聞けば？じゃあね。」

テレポーテーションでアジトへ

「また消えた。」

で、アジトで

「リーダー？」

「怪か、なんだ？」

「砂の人柱力が捕まって、木の葉が助っ人で動いた。」

「そうか捕まえたか……。」

「その中に九尾の人柱力がいる。」

「……本当か？」

「ああ、だから少し急いだ方が良かったと思つてよ。」

「……わかった、他のメンバーにも伝える。」

「ああ後、他にも来ないことを祈るけど……。」

「ガイ班が来るだろうけど。」

「じゃあ待ちますか。」

「……にしても怪？」

「なんだ。」

「お前の使っているのは忍術は？」

「んん、俺は人生で一度も忍術を使ったことはない。」

「それは、一体……。」

「秘密だ。」

「そうか……。」

いやあ。(後書き)

はい、次辺りかな。

封印一尾そして？（前書き）

どうするか？

封印一尾そして？

「リーダー？」

「なんだ怪？」

「言い忘れたけど、九尾の人柱力は自来也と一緒に修行していたから多分強くなっているぞ。まあ、メンバーよりは弱いと思うけど・・・」

「そうか・・・」

「ん、帰って来たようだ。」

とサソリとデイダラが我愛羅を連れて来た。

「遅かったな。」

「少し手間取ってしまった。お前が言ってたより強かったぞ、うん。」

「

「まあ、人柱力だし。」

「では、封印するぞ。」

それから、

「んん？」

「誰カアジトニ近ツイテイル。シカモ、ニツ。」

「多分、木の葉の奴等だ。一方は、九尾の人柱力だけどもう一方は応援だろう。」

「なんで分かるんだ？うん。」

「さつき会ったから。」

「なぜ、その時捕まえなかった？」

「綱手、自来也が一緒にいたからだ。後、はたけカカシがいたぞ。」

「で、誰が足止めに行きますか？」

「鬼鮫とイタチに行ってもらおう。サソリ、生け贄を。」

「俺の部下か？」

「それしかないだろう?」

「わかったよ。はあ。」

サソリはため息を吐いた。まあ、そりゃ部下がもついでなくなるとわな。

それから、二人が戻って来た。

「良い具合に時間稼ぎができたな。」

「では、封印を続けるぞ。」

そして、

「これで終わりだ。」

「はあ、終わった。じゃあ、寝てラーメン食いに行くか。」

「またなの?」

「今度八捕マルカモシレンゾ。」

「まあ、その時は暴れるよ。」

巨大化したりして。

「ああ、そういえば……。」

「ナンダ。」

「いや、ちよつとね。サソリ、デイダラ。」

「なんだ?」

「一緒に九尾を待ってて良いか?」

「……お前のノルマじゃあねえぞ。」

「いや、捕まえず待って聞いてみたいんだ。」

「何をだ?」

「九尾の人柱力は、風影と仲が良かったから多分キレていると思うから。」

「それが?」

「まあ、それだけさ。」

「……ノルマの邪魔をするなよ。」

「分かっている。」

っで待っているよ、

「来たな。」

「そうみたいだな、うん。」

我愛羅を助けに来た、

ナルト達が結界を破り入って来た。

「あの、金髪が人柱力だ。じゃあ、少し話をする。」

「わかった。」

で、ナルト達に近づいた。

「また、会ったな。」

「我愛羅を返せ。」

キレているな、

「まあ、その前に言いたいことがある。」

「なんだ。」

「もう、我愛羅は死んだぞ。」

「なっ!?!?・・・そんなの嘘だつてばよ。」

「もう封印をしたし息もしていない。」

「・・・なんでだ?」

「なにが?」

「なぜ、平気でこんなことをするんだ。」

「・・・他の奴は知らんが俺は組織として動いただけだ。」

「なんで、」

「組織で動くということとはこういうことだというのが現実だ。お前にもわかるだろう?」

「なんで、そんなに命を軽く見るんだ。」

「忍ではないが、上の命令・・・それでわかるだろう?それが忍だろう?」

カカシ達は黙っている。

「ぐっ、俺は認めない。我愛羅はまだ生きてる。」

「そうか・・・じゃあ用は済んだじゃあな。」

テレポーテーションで木の葉の一楽へ

「・・・変だな？俺はアンチみたいなのをしたな。」

まあ、前から変だということも言っただけか・・・

「とりあえず、味噌ラーメン、麺多めで。」

「あいよ。」

そして、ラーメンを食べた。

正直、今日はあまりうまく感じなかった。

封印一尾そして？（後書き）

はい。

バトルは無しだけど、アンチみたいになりました。

少年漫画だとしても、ナルトは本来忍者に向いている性格ではないのが事実だと思います。

食った後、
(前書き)

その後に、

食った後、

「戻って来たぞ。」

おお、我愛羅が生き返っている。

そして俺は……全員から、にらまれている。

「お前は……。」

「宿場の！」

「覚えていたか。」

「知っているのか、テマリ？」

「ああ。」

「何の用だつてばよ。」

また、キレたか。

「サスケの情報は手に入ったか？」

「あんた、何でそれを……。」

「個人的に知っていたただけさ。それより、まだ、連れ戻せると思っているのか？」

「お前、一体、」

「良いから、どっち？」

「サスケを連れ戻して、そしてお前らをぶっ潰す。」

「……まあ、よくそんな事が言えるな。何で復讐を邪魔するんだ？」

「なぜって、そりゃ」

「サスケの為って言うのなら、それは違うぞ。それは、サスケ自身がそれを選んだ事なのだから。……お前、本当はサスケが強くなるのに嫉妬しているんじゃないか？」

「違う、俺はサスケを仲間だと思って、」

「本当に仲間だと思っっているのか？だったら、サスケの邪魔をするのは違うと思うけどな。」

「ナルト、こいつの話の話を聞くな！」

「・・・まあ、いいやサスケにもし会えたなら、イタチを怨むなイタチは犠牲者だと、暁のメンバーの怪が言っていたと伝えてくれ。」

「どういう事だ!？」

「そのままの意味さ。俺も細かく知らないが、イタチは好きで一族抹殺をしたんだじゃないぞ

って事さ。簡単に言えば組織の裏って事さ。」

「それってどういう事、」

「じゃあな。」

テレポーテーションでアジトへ

で、

「サソリが負けた事によって、トビが正式メンバーとしてデイダラとコンビを組んだ。」

「前も、だけど」

「誰ト話シテイルンダ？」

「まあ、状況把握。」

「そう（カ）。」

「・・・にしても、芸術コンビがお笑いコンビに変わったな。」

「うん（アア）。」

「誰がお笑いコンビだ!うん。」

「良いじゃないですか、デイダラ先輩。」

「お前は、黙っている!トビ。」

本当に演技上手いなあ。

確実に角都と同じぐらいの年齢だろ。

多分・・・。

「さて、狩って金稼いでくる。」

「またね。」

「気ヲツケロよ。」

「ああ。」

テレポーテーション
さて、金稼ぐか。

食った後、（後書き）

また、アンチみたいになりました。
そういえば、アンチってバトル少ないなあ。

次は？（前書き）

少し時間を飛ばして。

次は？

今、不死コンビといいます。

そして、原作の地陸を狩った後の換金所に向かっています。

「今更だがよう、何で怪がいるんだ？もう、ノルマは達成しただろう。」

「ああ、そりゃ今から木の葉の人柱力のうずまきナルトを見に行くからさ。」

「何でだ？」

「んん、伝言をしたからさ。」

「何をだ？」

「ちよつとな・・・。」

「次は怪が持て。」

「ああ・・・にしてもお寺破壊し過ぎじゃないか？」

「しょうがないだろう、相手は3000万両の賞金首だからな。」

「バチ当たるか、って今更か・・・。」

「俺はジャシン教の戒律を守っただけだぜ。」

「そっぴゃ、そうか。」

で少し時間が経って、

換金所に着いた。

「俺は金を数えている。」

「じゃあ、俺はトイレで。」

「俺は外でいるぜ。ここは、臭すぎる。」

「まあ、トイレと死体置場ってのはないはな。」
「んで、」

「うるさいな。」

「敵だな。」

「飛段が戦っているな。じゃあ、俺は前から行く。」
「分かった。」

「おいおい、こりゃ刺され過ぎだろう飛段。」

「だったら、早く助ける！」

「「「「!?!?!?!?!」」」」

「お前は……。」

「情報じゃ、確か名前は怪。」

「気をつける。こいつは、変な術を使うぞ。」

「同じことをカカシにも言われたな。」

「おい、そっぴや角都の野郎は？」

角都がシカマルの後ろから、

「ここだ。」

「なっ。」

土遁・土矛で硬化した腕でシカマルを殴った。
でも、避けられたな。

「くっ。まさか3人とは。」

「暁は二人一組のはずじゃ？」

「今日は、木の葉に行くってことであまたま一緒にいたんだよ。」

「たく、飛段お前はまた刺されたのか？」

「しろうがねえだろう、あのガキが影を操って体の動きを止めに来たんだよ。」

「影は面倒だな。」

「お前らは手を出すなよ。コイツらジャシン様の生け贄にするんだからよう。」

ズッ

つと、飛段は体に刺さったでかいクナイみたいな物を抜いた。

「じゃあ、俺らは見物しとくぞ。」

「ああ、絶対手を出すなよ。角都も。」

「ああ、早く終わらせるよ
じゃあ、見物しとくか。」

次は？（後書き）

ちょっと、話を飛ばしました。

で、見物。
(前書き)

見物して、

で、見物。

では、

「ええっと、畳とちゃぶ台とお茶っと。」

「おい。何しているんだ？」

「暇だから。時間かかるだろうし、お茶いる？」

元ネタは、メトロン星人。

「・・・いる。」

「おい、あいつらなんかのんびりしているぞ。」

「手を出して来ないのならありがたいですよ。それより今はあの不死身野郎をどうにかしましょう。」

「ああ、そうだな。」

「ん？おい。角都、怪、何のんびりしてんだ！」

「お前が、そいつらを相手に1人ですから暇なんだよ。」

「俺も、怪と同じく暇だからだ。」

「くっ、俺の分も残してくれよ。」

「そんな、時間ねえよ。」

アスマが、チャクラ刀で殴りかかってくる。

「くそ！」

少し、時間が経ち、

「そう言えば、あのチャクラ刀で殴りかかってくる奴、賞金首じゃね？」

「ああ、飛段が仕留められなかったら殺るぞ。」

「ああって、飛段が捕まった。」

「おい、お前ら助ける。」

「動くか。」

「そうだな。」

「で、なに首斬られているの？」
「うるせえ。ってか、お前らわざと遅れてきただろっ！」
「1人で、殺るって言ったのはお前だろっ？」
「だから、見ていたんだ。」
「ぐっ、とりあえず首を早く着けてくれ。」
「怪。首と身体を押さえ付けてくれ。」
「あいよ。」
シユルシユル
「あいつら、何をしているんだ？」
「はあはあ。」
「シカマル、大丈夫か？」
「俺よりアスマを……。」

首を着けて

「にしても、どうする？」
「賞金首は、殺るぞ。」
「だろっな。飛段が、トドメさせよ。」
「ああ、分かっている。」
「さて、じゃあやりますか。」

で、

「影真似って事は、近くに行くと危ないから。」
「火の玉を吹いたり、」
「火遁。」
「土遁。」
「岩石を吐き出したり、」
「土遁。」
「さて、誤魔化しながらやった。」

原作の応援が来て、

「今、二尾、三尾の封印をやっています。」

「誰に言っているんだ？」

「いや大金、逃したなあつてこと。」

「まあな……。」

アスマを逃がしたのでした。

で、見物。(後書き)

まあ、誤魔化したのは気分的にです。

二尾、三尾封印。後は残り八尾、九尾。(前書き)

ええつと、次は不死コンビと怪対第十班です。

二尾、三尾封印。後は残り八尾、九尾。

「これで終わりだ。」

リーダーが言った。

6日もかかった。二尾、三尾の封印。

正直に言えば、やっと終わったか、と全員が絶対に思った。

「これで、残りは二匹だ。解散。」

「やっとか！」

「木の葉へ行くぞ飛段、怪。」

「お前ら木の葉へ行くんなら一つ忠告しとくぜ、うん。あそこにはうずまきナルトって人柱力がいる。そいつに遭ったら気を付けることだな、うん。」

「オイオイオイ！てめーと一緒にすんじゃねーよデイダラちゃんよオ！角都に腕くっつけてもらった弱輩もんが！」

「首よりはマシだ……。」

「そりゃあ、そうだな。」

「ってオイ！コラ、角都に怪！てめーらはどっちの味方だ!?!」

「どう考えたって腕より首の方がひどいだろうが。」
「当たり前だろうが。」

「……。」

イタチは、こつちを見て考え事。

「いいから、行くぞ。」

「チイ……。」

「俺は少し遅れて行くから先に木の葉へ行っていてくれ。」
「原作通りに進ませる。」

そして、少し時間が経ち、

「やられているな。」

今、角都の心臓をカカシの雷切が貫いているところ。

「まあ、あれは普通なら死ぬのだけだね。」

角都の心臓は、後4つか。

それから傍観し続けて、

今、飛段がシカマルに影に捕まってしまっただけでそのまま走って行ったので、

後、少しで、

「参戦するよ。」

「……誰も付いて行かなくて良いのか？飛段をみくびりすぎだ。

あのシカマルとか言う若造……高値の賞金首になっただるーに……

・今日で死ぬぞ。」

「……。」

「だが、お前らの判断は正しかったな。オレは……強い……。」

「……。」

それから少し経ってから、

「遅れて来たぞ。」

「……遅かったな。」

「……!？」

「まあ、トイレだね。飛段は？」

「影の小僧と一緒にどこかへ行った。」

「そうか、影の奴にか……。」

「お前は……。」

「カカシ先生、確かこの男は……。」

「暁のメンバーの怪。気をつける。」

「んん、サスケへの伝言、伝えてくれたか？」

「ああ……一体どうしたこと何だ？」

「まあ、そのままの意味だ。それより……殺るぞ。」
「くっ。」
「さあ、殺るか。」

二尾、三尾封印。後は残り八尾、九尾。（後書き）

この後、どっしり。

戦つか？(前書き)

とりあえず、投稿します。

戦うか？

「ここからは俺も参加するよ。」

「くっ……。」

まあ、適当にやるか。

「……カカシ……お前に減らされた分はお前の心臓をいただく。」

「しかも賞金首だね、高額なの。」

「……。」

ズズツ……

「（火遁と風遁の面が……。）」

そして、

ゴウツ

と、火遁と風遁の面が攻撃した。

「カカシ先生!!」

「水遁・水陣壁。」

ジュワワワ

「（風の性質変化が加わった火じゃ、水遁だけでは消せないか……）」

「俺もいるよ。」

「なっ!？ぐはっ。（速い!）」

と、飛び蹴りして角都の方へ飛ばした。
ズゾゾ

「ぐあっ!」

角都がカカシを捕まえ、

ドッ

そのまま地面に叩きつけた。

「先生ーっ!!」

「人の心配している場合か？」
と言い、

ゴオウ

と、俺は空から火球を吐き出した。(ゼットンの能力、弱め。)

「くっ!!」

チヨウジといのは避けた。

だけど、

ドゴウツ

「ぐあっ!!」

「なっ!?!」

火球が着弾した所は、

半径10メートルぐらいのクレーターを作っていた。

しかも、土が溶けていた。

「(弱めなんだが・・・ゼットン恐るべし。)」

そして、二人はケガを負っていた。

・・・おそらく、着弾した時の余波もあるだろう。

「怪・・・。」

「・・・すまん。」

角都に叱られた。

角都の方にも余波が来ていた。

「・・・カカシ、もらうぞお前の心臓・・・ぐっ。」

「!!?!」

もう、飛段が刺したか・・・。

「ま・・・まさか・・・。」

「そのまさかだ・・・お前の血を利用したのさ。シカマルには、奴が血を利用する能力があると分かってたからな・・・あらかじめ血液用カプセルを用意していたんだよ。」

「バカな・・・いつそんな隙が・・・。」

「オレの雷切で、穴を開けた時に一緒にお前の血をいただいたのさ。・・・お前からこそシカマルをみくびりすぎだ。アイツが・・・アス

マが命と引き換えに残した情報を無駄にする訳がない。」
ドサッ

角都が倒れた。

「カカシ先生！」

二人が、カカシに駆け寄った。

「角都の奴。(まだ死んでないだろうけど。)」

「ぐっ！」

「ゆっくり！すぐ医療忍術で手当てします。」

「手当ては後だ。まだ、厄介な奴がいるぞ。」

ダッ

「！」

残りの面が走っていた。

だが、チヨウジが、

「倍化の術。」

ポボン

と、でかくなって、

ズン

「超張り手。」

面を押し潰した。

「いいぞ、チヨウジ！」

「へへっ！」

「だけど、

「！」

ポフッ

ズオオオオ

と、土煙の中から面が出てきた。

「しまった！」

ズオオオオ

角都の体の中に入り込んでいる。

「・・・！」

「!!」

ズオオオオ

「オレの心臓を2つも・・・久方ぶりだぞ・・・それは・・・」
角都に駆け寄り、

「大丈夫か？」

「・・・これで、大丈夫に見えるか？」

「全然。」

「フン・・・それよりそろそろ、」

「ああ、終わらせるか。」

ズズツ

「ぐつ。」

「きやつ。」

「くつ。」

角都が三人を捕まえた。

ズチャ

「死ね・・・。」

そして、面で攻撃しようとした。

「!!」

「ただ、

「風遁・螺旋丸!!」

「水遁・破奔流!!」

「颯風水渦の術!!」

ドゴ

ゴゴゴ

「!?!」

「来たか。」

「遅くなって済まねーってばよ。」

「来たか、うずまきナルト。」

「・・・今度は、捕まえてやるってばよ。」

応援が来てしまったか・・・。

こりゃ、少し面倒だな。

戦うか？（後書き）

なんとか、バトル描写……って主人公の影薄っ。

おいおい・・・スズかよー！(前書き)

インキュレーターが出てきます。

おいおい・・・マジかよ！

・・・まあ、ナルトたちが来ることは分かっていたけどさ、
・・・でもさ、

「お前に、聞きたい事がある。」

ナルトに聞く。

「何だ？」

睨みつけてくるね、

「お前らの事は、大体は知っているが・・・お前らの後ろにいるイ
ケメンは誰だ？」

原作ではないぞ・・・あんなイケメン！

「俺はうずまきトウマ・・・ナルトの兄だ。」

イケメンが答えた。

えっ、

ナルトの兄貴？

確かに金髪だし、髭がなけりゃナルトにそっくりだが、

・・・まさか、

「うずまきトウマ・・・。お前、俺がどういう存在か分かるか？」

もしかして、

「ああ、・・・俺は、お前と同じだ。」

やっぱり・・・転生者か。

「そうか・・・角都！」

角都に言った。

「何だ？」

「目の前にいる金髪で髭を生やしている方の奴が、九尾の人柱力だ。
」

「！？・・・分かった。」

「心臓のバリエーション増えたな、人柱力以外はな。だから、あの
髭を生やしていない方の金髪は俺が殺るぞ。」

「……ああ……。」
さて、

「殺るぞ。」
音速ギリギリ前の速さで近づいて、
蹴り（岩石で出来た足の）をトウマにいった、
けど、

ギーン

「くっ。」

「反応、出来たか……。」
なんだか、でかい剣で止められていた。

まあ、ギリギリだったけど。

「木遁・大樹林の術。」

「うお。」

横から、木の枝の固まりが出てきて、
お互い、後ろに飛んだ。
つてか、

「あの剣は確か？」

Fateってゲームの宝具だったけ？

まあ、本体がないし大丈夫か。

「そいつは相手したくないね。（本体いないから大丈夫だけど。）」
剣に指を指した。

「だろうな。」

さて、確かあれってメチャクチャな能力の宝具がいつぱいあるな。

「はあ！」

頭から、斬りかかって来た。

「おっと！」

横に体をずらした。

……剣を振るのは速いな、
音速では無いが。

まあ、普通は無理か……。

「ふん！」

拳を、腹に突き出した。

ギーン

「ぐっ。」

剣の柄で止めたか……。

後ろにジャンプして、

空中から、

「火の玉。」

掌から火の玉（１メートル位の）を５発ぐらい出した。

「おらあ！」

それを、

弾いて回避した。

「まだまだ！」

今度は、直径５メートル位の火の玉を出した。

「はあ！」

今度は、

ザンツ

おいおい、斬るのかよ！

「よくも、まあ斬れるよ。」

つてうん？

「危な！」

横から、クナイが飛んできた。

それを避けて、

「おいおい、分身かよ。」

クナイを飛ばしてきたトウマの分身に近づいて、

ザツシュ、ポン

剣にした腕で斬った。

「はあ！」

「ふん！」

今度は、腕で受け止めた。

そして、

「ガハッ。」

膝蹴りした。

そして、トウマは後ろに後退した。

「はあはあ。」

「よく、動きに追いつけるな。」

「一応、手加減しているけどね。」

おいおい・・・マジかよ！（後書き）

ああ・・・これで良いのか？

はあ・・・。(前書)

これから？

はあ……。

続き、

「本当によく、着いてこられるよ。」

目の前のトウマとかいう、ナルトの兄で転生者に言った。

「はあはあ……はあ！」

でかい剣を振り、そこから何か光？みたいなのが飛んできた。

「危な！」

トウマの横に音速ギリギリで移動して回避する。

ビューン、ズバツ。

「ん？……嘘だろ。」

かなり遠くの方まで、剣筋の方向の木が綺麗に真っ二つになっていた。

「威力あるな。」

「くっ。」

……あれ？

おかしいぞ。

Fateの転生者ってかなり強いはずだし、

さつきから、エクスカリバー？っていうのしか使っていない……。

……待てよ？

もしかして、

「お前、囷だな。イレギュラーである俺が、角都と一緒にナルトを捕まえないか危惧しているな。」

びくっ！

……みたいだな。

となると、1人で俺の相手をする事を他のメンバーがOKしたって事は、

かなり強いって事か……。

ズドーン

「うお。」

この音、まさか！

「・・・角都の奴。」

負けたか。

「これでお前だけだな。」

おいおい、さっきの息切れないのかよ。

「まあな。じゃあ、俺は、ナルトたちの方へ、」

「行かせるか！」

さっきより、速いな。

だが、

テレポーション

「くっ、ナルト！そっちへ行ったぞ！」

ナルトの近くで、

「くっ、ナルト！そっちへ行ったぞ！」

トウマが、ナルトたちの方へ叫んだ。

「ここだ。」

角都の横に着いた。

つてうお、全員からにらめつけられてる。

「怪・・・か？」

「大丈夫では・・・無いな。」

「俺が・・・こんな・・・ガキたちに・・・負けるとは、」

「それより心臓が、」

「エクスカリバー！」

「くっ。」

それを後方へジャンプして避ける。

ドゴーン

もう来やがったか。

つて、

「目当ては、角都の奴か。」

くそ、こりゃ死んだか。

「後は、お前だけだつてばよ。」

「・・・逃げるか。」

「待て！」

「待たな、「ザグツ」ぐはっ。」

「これで、終わりだな。」

エクスカリバーと雷切りが体に刺さつてた。

「くそ。」

そのまま体が倒れた。

「・・・死んだか？」

「!?!?みんな、こいつから離れろ!自爆する気だ。」

「くっ。」

「何!」

全員、離れ出した。

そして、

ドゴーン

そのまま、爆発した。

「くっ、デイダラつて奴と同じだ。」

「自爆するとは。」

「イタチの事が聞けなかつたてばよ。」

「そう簡単に死ぬか？」

カカシが、言った。

「どういう事ですか？」

トウマが、聞いた。

「あの男の術は、不明な部分が多いって事さ。」

「じゃあ、あいつは生きていますか？」

「それは、わからんがそう簡単に死ぬとは思えん・・・。」

「俺も、だつてばよ。」

「一体、あいつは何者だつたんだ？」

そうして、暁討伐任務が終わった。

はあ・・・。(後書き)

言っておきます。

主人公は、生きています。

じつままきトウマの設定。(前書き)

こうかな？

うずまきトウマの設定。

名前 うずまきトウマ

容姿 波風ミナトとほぼ同じ

年齢 ナルトたちと同じ年

性格 クールで、ナルトを大事に思っているが、原作は見守る気
でいる。（怪がいる事が、分かってから原作介入している。）

能力 Fateのセイバーと土郎の宝具（能力）が使用できる。魔
力では無くチャクラで、代用して使っている。

ナルトの双子の兄。

事故で死んでしまったが、それが手違いだという事で転生（ナルト
の兄になったのは、神のお遊びが原因）させてもらった。最初は、
あまり原作介入していなかったが怪の事が分かり介入している。

ナルトとは、同じ班。（ナルトと同じように、落ちこぼれまで実力
を隠していた。）

怪と会わなかったのは、多くをガイの班で行動していたから。（最
近は、我愛羅奪還の後はナルトたちと行動している。）

チャクラの量 ナルトの10倍（宝具を使用する場合ナルトと同じ
ぐらいまで落ちる。）

忍術 雷遁と土遁が得意。

だけど、宝具の方を多く使用している。

多重影分身は、得意。
螺旋丸と千鳥は、使用可能。

じずまきトウマの設定。(後書き)

良いかな？

自爆後。(編集しました。)(前書き)

自爆後です。

自爆後。(編集しました。)

怪が自爆した後の暁、

「不死身コンビと、怪が死んだ。」

ゼツが言った。

「本当かよ。あの不死身コンビと怪が。」

デイダラが、言った。

「。。。。」

リーダー、イタチは、黙っている。

「おやおや、あの男たちがですか。」

鬼鮫が、言った。

「シカモ、怪八自爆だ。」

「何!?!」

「。。。デイダラ先輩。」

「何だ、トビ?。。。って何で、全員俺を見ているんだよ!」

全員、デイダラを見ている。

「いやだって、デイダラ先輩がそんな事を教えてそうで。。。。」

「してねえよ!」

「つてか俺は、死んでいねよ!」

「。。。!?!」

「戻って来たぞ。」

「自爆したのじゃなかったの?」

ゼツが、言った。

「いやいや、そう簡単に死にたくないよ。」

「ジャア、ドウヤツテ?」

「まあ、簡単に言えばデイダラと同じやり方で。」

実際は、ただ面倒臭くなつて自爆して体をもう一度作ったのだけどね。本体は、別の空間にいるし。

「俺のマネかよ!」

「デイダラより、威力は無いけどね。」
「怪。」

リーダーが、言った。
「何だ？」

「お前は、これから1人で角都たちの代わりに賞金首を狩ってもら
うぞ。」

「分かっているよ。それより、」
イタチに近づいて、

「何だ、怪？」

「イタチ・・・うずまきトウマって、知っているか？」

「うずまきナルトの兄か？」

「知っていたのか？」

「前に木の葉で、うずまきナルトと一緒にいたが？」

「そうか・・・。」

俺は、偶然会えなかったのか。

「それが、どうかしたのか？」

「いや、少し気になってな・・・ちょっと、木の葉行って来る。」

うわあ、全員からにらまれた。

「リーダー、九尾・・・捕まえられれば捕まえてきていいか？」

「まあ、良いが・・・。」

「じゃあ、行って来る。」

テレポーテーション

で、今一楽に来て、

「会いに、来たぞ。」

「・・・！」「・・・」

ナルト、サクラ、サイ、カカシ、トウマがラーメンを食っていた。

「やっぱり生きてたのか。」

カカシが、言った。

「まあな。」

「はあ！」

トウマが、エクスカリバーで斬りかかって来た。

「ふん！」

それを、右手（剣にした）で受け止めた。

「いきなりだな。うずまきトウマ。」

「あんたに、とっちゃ遅いだろ？」

「まあな。にしても、ラーメン食いに来ただけなんだから。」

「嘘をつけ。」

「嘘じゃねえよ。それより、ナルトたち動いて無いけど？」

「ん！？みんな！」

空いた片手から、金縛り光線を出しておいた。

「お前もだ！」

トウマにも、金縛り光線を出した。

「くっ。」

放っておいて、

「おじさん、味噌ラーメン一つ。」

「……あいよ。」

そう言っつてテウチのおじさんが、用意してくれてる。

「暁のメンバーなのに、ありがとうよ。」

「……お客には、違いねえ。」

「……こういう性格だから、ナルトは性格が歪まないんだな。」

「……あんた、何で暁のメンバーになったんだ？」

「俺か？俺は、他のメンバーと違って特に理由が無いな。俺は、ま

ず忍じゃ無いし。」

「……ん？忍じゃ無いのか？」

この人、俺が暁だつて忘れてるのか？

「ああ、俺はまず忍術は使つて無い。」

「じゃあ、ナルトたちを動かすのを止めている方法は？」

「……あんた、わざと情報を引き出そうとしているのか？」

それとも、興味本意か？

「それは、言えねえ。ナルトたちは、止めていると言ってもこの会話は聞かれてるしな。」

「そうかい・・・あいよ。」

「ありがとうよ。うん、何度来てもうまい。」

「ん？前も、来た事があるのか？」

「ああ、木の葉崩しの時に最初に食べてから何回か来てるぞ。」

「そうか。」

ズズツズズツズ。

「ふう、うまい。ごちそうさま。」

「ありがとうよ。」

「さて・・・野次馬、多いな。」

そりゃ、剣を持ったトウマが静止していたらなそうなるわな。

「で、ナルトたちは動かしてくれねえか。麺が、のびちまう。」

「ああ、あいよ。よっと。」

金縛りを解いた。

「くっ。」

「何だつてばよ。さっきのは？」

「この、」

トウマが、斬りかかって来た。

「止める、トウマー！」

カカシが、止めた。

「なぜですか？カカシ先生。」

サクラが、言った。

「こいつに、敵意があればもう俺達は死んでいるぞ。」

「まあ、そう言う事。じゃあな。」

テレポーテーションで賞金首を狩りに、

「何だつたんだ？」

全員が、思った。

自爆後。(編集しました。)(後書き)

書きました。

これで良いかな？

次は・・・足止めみたいな何か。(前書き)

まあ、遊戯王の方を多く投稿していました。

次は・・・足止めみたいな何か。

今、雲隠れ、

「やめる！・・・助けてくれ！」

「いやいや、結構あんた人殺してるね。しかも、さっき部下ごと殺そうとしたし今さらそれは無いよ。」

グサッ

腕を、剣にして刺した。

「うっ。」

・・・バタッ

今、不死身コンビの代わりに賞金首狩っています。

相手は、まあ自分の部下ごと殺そうとした奴だからあんまり・・・なあ？

一応、霧隠れの抜け忍。しかも、かなりの大人数。

「にしても、これで合計3000万両か・・・。」

ええっと、後残っている抜け忍は・・・。

おいおい、残っているの小物か里の上忍ぐらいか・・・。

「まあ、まず換金するか。」

さっき、殺した元霧隠れの上忍の死体を持って近くの換金所へ。

痩せ細い男が、

「はいよ、金だ。」

ドスン

「・・・ああ、確かに全部で3000万両だな。じゃあな。」

「あいよ。」

テレポーテーション

アジトでリーダーに、

「はい、3000万両。」

金を、リーダーに渡した。

「ああ、分かった。」

「そっぴや、今デイダラとトビがうちはサスケを探しているのか？」

「そっぴらしいぞ。」

「って事は、うずまきナルトたちも探しているか？」

「それは知らん。」

「それもそうか。」

じゃあ、ナルトたちの方へ行くか。

さてと、木を跳びながら見つけたけど。

ヒナタに、キバに、シノ・・・感知タイプ多いな。

トウマはいるぞ、当たり前だけど・・・。

まあ実体無くして、

「また、会ったな。」

「!?!?」

おお、びっくりしているなあ。

「・・・また、お前か。」

カカシが、すごいいやな顔で言った。

「そういう事だ。」

「カカシ先生・・・。」

「こいつは？」

「暁のメンバーの怪って奴だ。」

「こんな時に。」

「おい、イタチの居場所知っているだろ。」

ナルトが、聞いてきた。

「いや、最近は会って無いから知らん。」

「嘘つけ!」

「本当に知るか!こっちだって最近、直に会ってないんだぞ。直に、

会うにはリーダーの術か本人に聞くしかねえんだよ。」
『リーダー？』

「どっちにしてもそこを退くか、捕縛するぞ。」

「もしくは、抹殺か……。」

「そういう事だ。」

なら、

「だったら、エクスカリバー！」

右手を、エクスカリバーにして斬撃を出した。(マックスに出てきたイフのコピー能力)

『なっ！？』

「くっ、エクスカリバー！」

ギーン！

相殺された。

「あれって、」

「トウマの剣。」

「どういう事だってばよ？」

「一体、どうやって俺のエクスカリバーを！」

「さあな。だけど、良いのか？俺は、言うなら時間稼ぎだよ？」

「どちらにしても、退かないだろうが！」

「まあな、そういやデイダラと、トビの二人がサスケの奴探していたぞ。デイダラは、殺そうとしているけど……。」

「デイダラ……確かあの爆発野郎か。」

「そういう事。」

「木遁・大樹林の術。」

「くそっ！」

横から飛んできた木をジャンプして避けた。
ヤマトの術か。

「人数的には、僕達が勝っている。」

「だから、焦らないでチームで行くぞ。」

俺はしたくないけどね。

次は・・・足止めみたいな何か。(後書き)

ああ、バトル描写苦手。

足止めをこころ。 (前書き)

まあ・・・。

足止めをしている。

さてと、

「はあ！」

トウマが、エクスカリバーで斬りかかってきた。

「よっと！」

それを、剣にした腕で止める。

ギーン

合わさって音が鳴り、

「「おらあ！」」

と、二人のナルト（一方が影分身）がクナイを持って突っ込んでくる。

で俺は、

「おっと！（テレポーション）」

テレポーションして木々の方へ逃げて、

「「ぐあ！」」

ナルトが影分身とぶつかり、

ボンッ

つと言い、一方の影分身が消えた。

「こつちだよ、何しているの？」

と、挑発している。

「くそ！」

「また、避けられた！」

ついでに言えばキバも攻撃に加わっていたが、

「クウーン。」

赤丸に、なめられている。

一回突っ込んできて、そのまま地面にぶつかり気絶している。

他は、俺の事を分析している。

さてと、

正直、俺は強く無い。

だって、全てのウルトラマンに出てきた怪獣の能力を持っているけどただそれだけだから。

まあ、能力で本体の体は別の空間にある。

今あるこの体の正体は、土と本体から送っているエネルギーで作った体だ。

まあ、簡単に言えば螺旋丸ぐらいで吹っ飛ぶ・・・再生できるけど。それに、精神的にも弱い。

正直、そこまで人を殺したくない。(悪人は、ギリギリ割りきっているけど。)

暁のメンバーの殺気とかは、今でも恐い。

だから、空間に隠れて攻撃して命を奪っている自分は卑怯だと思う。

まあ、こんな写輪眼なんて訳のわからん能力がある世界だしね。

だから、経験もほぼ無い。

「バトルとか全部力任せなんだ・・・。」

体が追いつけるだけで、全然経験は無い。

「さてと・・・おいおい、何やってるの君？」
ブオーン

シノが蟲・・・ってか多い！

「って、しかも来たあ！」
だけど、

「あまいなあ！」
実体を無くした。

『すり抜けた！』

「そういう事！」

まあ、土に能力を持たせる事ができる事に今でもびっくりしているけど。

「じゃあ、」

ドゴーン

遠くから、爆音と光が出てきた。

『!?!?』

「もう、終わったのか?」

デイダラの自爆……。

「おい、お前今の知っているのか?」

ナルトが、聞いてきた。

「ああ、デイダラの自爆だ。多分、サスケが相手に使ったんだらうよ。」

「なっ!?!?」

これで、足止め終わりか。

「じゃあ、帰るわ。」

『はあ?』

テレポーターションで、俺はアジトへ帰った。

まあ、サスケの事については……どっちでも良いか。

暁……メンバー少なくなったなあ。

足止めをしている。(後書き)

まあ、足止めですので・・・。

わつじ、今からは……。(前書き)

怪は……。

さてと、今からは……。

アジトで、

デイダラとサスケが、相打ちで死んだとゼツの奴が報告していた。

「やっぱり、デイダラの奴は死んだか？」

と言ったら、

「怪か……お前も、そっちに向かったのじゃなかったのか？」

リーダーに聞かれて、

「いや、その前にうずまきナルトを見つけたんだが人数的に不利だったから途中で戻って来たのだが……。」

「……そうか。」

何か、怪しまれているなあ。

まあ、最近の行動はわざとうずまきナルトを見逃しているように見えるからな……。

でも、しょうがないでしょうが。

下手に、主人公を殺したら世界の修正力辺りがどんな行動をしてくるか分からないし、もうしかしたら、この世界を一度全て消してもう一度作り直すかもしれないのだから。

だから、主人公を殺そうとしていないのだから……。

今、俺は、

「おっちゃん、味噌ラーメン大盛り。」

「あいよー!」

一樂で、ラーメン食っています。

え？何でいるか？

だって、ここはうまいんだよ。

ただ、それだけだ。

「へい、お待ち！」

「おお、いただきます。」

いつも、思うけどうまいなあ。

だけど、

「本当に、よく作ってくれるよなあ。」

「ん？そりゃお客なんだからな。」

「・・・ありがとう。」

この人、本当に良い人だ。

ズズッ

「・・・まさか本当にいるとはのう。」

「ん？この声は・・・あんたか。」

地来也か・・・。

「まさか、また来ているとは・・・。」

「ふん！お前たち、暁のリーダーの居場所はもう分かったんだぞ！」

綱手か・・・。

「だから？つてか、リーダーの居場所なんてメンバーでさえ知らな

いから・・・まあ、あんたにとってはリーダーの相手は辛いだろ

けどな。」

元弟子だからなあ。

「それだけか？」

「ああ。つてかリーダーがどういう人が知っていて言っているの？

あんたらが、束になっても勝てないね。」

あの輪廻眼は、面倒だからなあ。

「ふん、どうだかのう。」

ズズッ

「うはあ。ごちそうさま。まあ、あの人は平和を求めて動いている

人だからね。その為に、尾獣を捕まえているからね。」

「平和だと？」

綱手が聞いてきた。

「そう。まあ、それは本人に聞いてくれば？行くんだらう雨隠れに一人で。」

「・・・なぜ、わしが1人で行くと知っている。」

「まあ、その事についてはノーコメントで。」

「お前、この状況でよく言えるな。」

綱手が、しかも暗部が近くにいるなあ。

さてと、

「帰る、じゃあな！」

「待て！」

「待たん！」

テレポーテーション

さてと今、木の葉の里の外で考えている。

「俺は・・・。」

どうしようかな？

正直、この辺りからの原作はあまり興味無いなあ。

・・・そうだ！

「八尾の人柱力・・・キラァ・ビーを見てくるか。」

もちろん、捕まえないよ。

「原作ずれるし。」

さて、雲隠れへGO！

さてと、今からは……。 (後書き)

まあ、こうなります。

主人公が、死んだらその世界の存在理由が無くなるからなのでたぶん、世界は消えると思いました。

キラール・ムーは・・・エリッ。(前巻巻)

雲隠れです。

キラール・ビーは……どっか？

さてと、今は雲隠れ近く、

「……前から、思っていたけど殺風景だなあ。」

ほほ、土ばかりだし。

観光で、行きたいとは思わん。

まあ、火の国……木の葉が観光で行きたい国（里）で1番なんだけどね。

……ガイドブックに載っている情報では。

「どこだ、キラール・ビーは？」

いや、本当に分からんのだけど。

里の人間は、知っているけどどこに居るかは分からんって言うし。

「ってか、抜け出して遊んでいるってよく聞くけど。」

それだと、どこに居るか分かんねえよ。

「だから、探しているけど。」

ヘタしたら、雷影が出てくるだろうなあ。

キラール・ビーを捕まえるために……。

「あれって、多分音速までとは行かなくても一発一発が重いだらう

なあ。」
いや、本当にあんなんで殴れたく無いよ。
地面に、ひびを入れるし。
それを、連続って綱手でも連続は無理だぞ・・・多分だけど。
「・・・さて、また探すか。」

で、

「居たけどさ。」

遠くから見えるけど、

「ウイー！」

『ウオオオオオオオ!!』

何？これは？

ライブ？

つてか、

「観客の忍・・・多過ぎだろ。」

お前ら、任務はどうしたんだ？

それに、何で人気あるんだ？

ラップ・・・ヘタじゃないか？

「木の葉と全然違うな。」

雲隠れってどうなってるんだ？

人柱力が、英雄扱いだぞ？

「何度が、賞金首を狩るのに来たけどさ。」

これは、見たこと無いぞ。

「何を、やってんだああああ!？」

ドツガア―

「うお！」

何か、筋肉モリモリのじいさんに飛び蹴りされてぶっ飛んだ。つてか、雷影？

「お前は、また抜け出したなあああー！」

あつ、抜け出したんだ……。

……これはコントか？

「おもしろいなあ。」

いや、見ていて本当にコントだよ……これは。つて、

「何か、雷影がこっちを見ているような……。」「……逃げよう。」

「うお！？」

ドゴン

「……クナイ？」

バチバチ

しかも、雷の性質変化を帯びているし……。

「どこに行く気だ……暁？」

「来るの早っ！？」

おいおい、ここからかなり距離がある筈なんだけど。しかも、

「囲まれているし。」

50人ぐらい……。

つてか、よく見たらさっきの観客達も居るじゃねえか。

「コイツが、ユギトさんを……。」

「みたいだな。」

「……殺す。」

なんか、殺気を出している奴が居るなあ。

「はあ、面倒だ。」

キラール・ビーは・・・とじっ。(後書き)

まあ、こうなるよね。

避ける！（前書き）

まあ、こんなんです。

避ける！

でも、

「多いなあ。」

ここまで、囲まれた事は無いよ。

「ふん、当たり前だ。」

雷影が、言った。

「どういう事だ？」

「暁・・・お前は堂々と、この里に入ってきたからな。だから、今居る里の忍をできるだけだけ動かしたんだ。」

ああ！

俺、毘に嵌まったんだ。

「意外と、頭良いな。」

あんま、頭は良く無いイメージあるのに。

「ふん、この状況で良く言えるな。」

「まあな。」

似たような事を、よく体験しているからな。

「・・・よし、逃げよう。」

「させん！」

雷影が、殴りかかって来た。

それを、ギリギリ避けた。

「危ないなあ。」

「・・・余裕あるな。」

いや、結構焦るよ・・・この速さは。

「逃げよう。」

「ふん、オラァ！」

また、殴りかかって来たよ。

「うお！」

それを、避ける。

つてか、微妙に速くなっているんだけど。

「オラァ！」

避ける。

「危ないな、つてうお。」

「嘘をつけ！」

「まあね。」

「ふん！」

「うおっと！」

・・・そういえば、他の奴等は？
げっ。

なんか、術の準備してるし。

結界か？

どちらにしても、

「逃げる！」

「ぬお！」

空を飛びます。

「飛んだ？」

「クナイを、投げて撃ち落とせ！」

うお、投げてきたってが多い。

「でも、避けれる。」

飛んで、当たらない位置まできた。

「よし、これなら・・・ん？」

「うおら！」

雷影が、殴りかかって来た。
つて、

「危ね！」

「くそ！」

何で、ここまで飛んで・・・ん？
なんか、下でタコの足が見えるが？

・・・キラール・ビーが、投げたのか。

そして、雷影は落ちて行って、

「って、また飛ばして来やがった。」

「うおら！」

「避ける！」

そして、またキラール・ビーのタコの足の上に落ちていって、

「・・・面倒だから、このまま逃げようっと。」

テレポーテーション

アジトで、

「リーダー。」

「怪か、何だ？」

「さつき、八尾の人柱力を狩ろうと雲隠れ行っただけど、」

「だけど？」

「なんか、雷影が出てきたからそのまま戦闘したけど無理そうだったから戻って来た。」

「・・・そうか。」

まあ、捕まえられ無いって言う嘘だけどね。

一応ね・・・。

避ける！（後書き）

いねで・・・ね？

NARUTOでの最終回。(前書き)

いきなりの最終回です。

NARUTOでの最終回。

さてと、

「味噌ラーメン一つ。」

「あいよー!」

また、食いに来てます。

まあ、そろそろリーダーが木の葉を襲撃するだろうし、もう食べ無くなる可能性があるしね。

つてか、リーダーが1番忍のレベルを軽く超えてないか？

普通、あんな一気に壊す事できねえよ。

まあ、自分もできなくは無いか……。

「はいよ、味噌ラーメン。」

「ありがとうよ。」

ズーツ

……さつきから、ものすごく見られてるような？

まあ、当たり前か……普通こんな所で犯罪者が食っている事がおかしいか。

いや、感覚的にこれは……チャクラがあるな、

忍か？

そういや、根の忍って奴とはサイ以外に会った事が無いなあ。

見張っているのか？

まあ、流石にここで戦闘をしないか。

ズーツ

「ごちそうさま、じゃあな。」

テレポーテーション

さてと、木の葉の近くの森で

「どうしようかなあ？」

正直、これからのNARUTOは興味がないしなあ。

「違う世界に行こうかなあ？」

え？どうやって？

宇宙に出て適当に探したら、他のアニメの世界とかあるんじゃないの？

だって、広いしこの世界の宇宙がどうなっているのか分からないのだから、

どっかで、繋がってんじゃないの？

あっ、

「そういえば、十尾って月に封印されてるんだっけ？」

六尾はナメクジだったけど、十尾は？

・・・まあ、どっちにしてもまともな生物？では無いな。

「さてと・・・行くか。」

そうして、怪の体は土になって崩れた。

異次元で、

「久しぶりに、体を動かすなあ。」

ゴキゴキ

体を動かした。

「ちよつと、鈍って……って当たり前か。」

もう、長く土でできた体で行動していたからなあ。

「まあ、取り敢えず。」

月に行くか。

月の表面で、

「エネルギーがすごいな。」

これは、チャクラじゃ無いなあ……マイナスエネルギーってやつか？

まあ、どうせ戦争とかの怨みとかもあるだろうけど。

……封印されてんな。

当たり前だけ……。

いただく事は、できないなあ。

危ないだろうしね・・・この世界的に、

「さてと、」

さらば、NARUTOの世界。

さらば、NARUTOで読んでいただいた方。

「もうしかしたら、暇潰しで来るかもな・・・じゃあな！」

そうして、怪は新しい世界に向かって飛んだ。

そして、NARUTOの世界ではベインが仙術を修行したナルトと
トウマが戦闘を行っていた。

その後は、トウマが居る事以外に原作は進んでいった。

終り。

続編は、まあ「怪獣対本家怪獣」かな？

NARUTOでの最終回。(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

これ以上、怪を原作に参加させるのは無理だと判断しました。身勝手だと思いますが、本来の力を使う為に行かせました。

怪は、次の世界を探しに行きました。

では、もしかしたら次の世界で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4539t/>

怪獣対忍術

2011年9月4日22時43分発行